

## A P Oの竹中繁雄事務総長

生産性は「労働」から「緑」に

## 「グリーンは長期的利益」

来年で設立五十周年を迎える国際機関A P O（アジア生産性機構、本部・東京）は、アジア太平洋地域での生産性向上を目指し、研修やワークショップなどを続けている。一年間の活動の中でも最大級のイベントであるエコプロダクツ国際展は、二〇〇四年にマレーシアで始まり、A P O加盟国を巡回する形で毎年開催されており、今回のジャカルタ開催で六回目となる。竹中繁雄事務総長に、エコ展の意義や成果などについて聞いた。

（上野太郎）

日本生産性本部が主導的な役割を果たし一九六一年に設立されたA P O。当時は、「生産性」と言えば、労働生産性を指すことが多かったが、一九九〇年代初めに「緑の生産性」の重要性を提起し始め、近年、関心が高まる環境問題への取り

組みに先鞭を付けた。竹中氏は「当時、環境対策はコストという発想だったが、『数十年経てば環境の問題が出てくるのは明白で、グリーンであることが企業の長期的な利益につながるのでは』と言いつつ」と語る。緑の生産性向上を目指し

た最大の取り組みとして、加盟国を毎年巡回する形でエコプロダクツ国際展を始めた。竹中氏は、ベトナム・ハノイで行われた二〇〇八年に、来場者数が前年のシンガポール開催から倍以上となる九万八千五百人になり、「環境意識が変わってきているのを感じた」と語る。

エコ国際展では毎年、日本と開催地の企業や団体が中心に出展。竹中氏は「環境分野で、日本の企業は世界でも先頭を行っており、世界最高水準のイメージを持つてもらおうのが一つの目的。現地企業については、規模が小さくてもいろいろ



な取り組みを行っているが、焦点が当たりてくいたため、展示会をアピールの場にしてもらえればと思っている」と趣旨を説明する。

国ごとに関心を持つ分野が異なるのも興味深いという。「シンガポールでは、いかに節約して水を使うかなど水の問題が大部分だった。

インドネシアは、国際会議で森林伐採の話がずいぶん出てきた。『環境』と言っても、国によってとらえ方が違うということを学んだ」と話す。

第一回開催地のマレーシアでは近年、環境対策への取り組みが高まり、グリーン技術を名称に冠した「エ

2004年のA P O事務総長就任以来、3回目のインドネシア訪問という竹中氏。清水淳平写真

ネルギー・グリーン技術・水問題省」が新設されたほか、今年は独自にエコプロダクツ展を初開催する準備を進めているという。

インドネシアも環境対策への取り組みを強化し始めており、竹中氏は「フィリピン・マニラで行われた前回と比べても、政府の実務者のトップレベルがたくさん参加してくれ、実際の環境政策の今のレベルは別にしても、政府が『何かしなくては』という意欲を感じる」と述べ、今後の成果に期待を示した。

## インドネシア政府に手応え